



TITLE:

VII. 共同利用研究, 4.共同利用研究会

AUTHOR(S):

CITATION:

VII. 共同利用研究, 4.共同利用研究会. 霊長類研究所年報 2016, 45: 118-126

ISSUE DATE:

2016-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226045>

RIGHT:

研究実施者

<平成 24 年度>

H24-A6 チンパンジーの視覚・注意の発達変化に関する比較認知研究(牛谷智一・後藤和宏)

H24-A7 チンパンジーの口腔内状態の調査：う蝕・歯の摩耗・歯周炎・噛み合わせの評価を中心に(桃井保子他)

H24-A8 霊長類における時空間的な対象関係の理解に関する比較研究(村井千寿)

H24-A9 二卵性ふたごチンパンジーの行動発達に関する比較認知発達研究(安藤寿康・岸本健他)

H24-A10 足形態と成長パターンと位置的行動の関係:ヒトとチンパンジーの比較(権田絵里)

H24-A12 チンパンジーにおけるトラックボール式力触覚ディスプレイを用いた比較認知研究(酒井基行・田中由浩・佐野明人)

H24-A13 Study of the Metacarpal Growth and Aging in *Macaca fuscata* using Microdensitometry (Tetri Widiyanti, Bambang Suryobroto)

<平成 25 年度>

H25-A5 チンパンジーの口腔内状態の調査：う蝕・歯の摩耗・歯周炎・噛み合わせの評価を中心に(桃井保子他)

H25-A8 チンパンジーの視覚・注意の発達変化に関する比較認知研究(牛谷智一・後藤和宏)

H25-A9 チンパンジーにおけるトラックボール式力触覚ディスプレイを用いた比較認知研究(田中由浩・佐野 明人)

H25-A10 チンパンジーにおける質感認知に関する比較認知科学研究(伊村知子)

H25-A11 チンパンジー母乳における生物活性因子と子供の成長との関係性(岡本-Barth 早苗・Robin M. Bernstein)

H25-A13 霊長類における時空間的な対象関係の理解に関する比較研究(村井千寿子)

H25-A14 二卵性ふたごチンパンジーの行動発達に関する比較認知発達研究(安藤寿康・岸本健他)

<平成 26 年度>

H26-A7 二卵性ふたごチンパンジーの行動発達に関する比較認知発達研究(安藤寿康・岸本健他)

H26-A10 チンパンジーの口腔内状態の調査：う蝕・歯の摩耗・歯周炎・噛み合わせの評価を中心に(桃井保子他)

H26-A14 チンパンジーにおける質感認知に関する比較認知科学研究(伊村知子)

H26-A16 霊長類における音声コミュニケーションの進化および発達過程の研究(平松千尋・山下友子)

H26-A18 チンパンジー母乳における生物活性因子と子供の成長との関係性(岡本-Barth 早苗・Robin M. Bernstein 他)

H26-A22 チンパンジーの視覚・注意の発達変化に関する比較認知研究(牛谷智一・後藤和宏)

(文責：友永雅己)

4. 共同利用研究会

「法改定に伴う今後のニホンザルの保全と管理の在り方」

日時：2014 年 5 月 17 日(土)～18 日(日)

場所：京都大学霊長類研究所大会議室(参加人数：80 人)

研究会世話人：森光由樹(兵庫県立大)・川本芳(京大・霊長研)

共催：日本哺乳類学会保護管理専門委員会 ニホンザル部会・日本霊長類学会

1999 年に鳥獣保護法が改正され、科学的・計画的な保護管理の枠組みとして特定鳥獣保護管理計画制度が創設されてから 15 年が経過した。特定鳥獣保護管理計画制度は日本の鳥獣行政の中に定着し、計画的・科学的な保護管理を目指す様々な試みが各地で進められている。ニホンザルは、データの蓄積や管理体制の整備が進み、管理目標をある程度達成する状況が一部の地域で生まれている。しかし、その反面、管理目標を達成できない自治体、計画の策定を行わない自治体もある。ここ数年、ニホンザルを取り巻く環境は著しく変化しており、その対策として、2015 年度より鳥獣保護法が改正施行される。また、動物愛護法、外来生物法の一部が、すでに改正施行されている。市町村では、特措法(鳥獣による農林水産業等に係る被害の防止のための特別措置に関する法律)による予算が獲得され被害防除が進められている。鳥獣行政は変革の時期に来ている。この研究会の目的は、ニホンザル保護管理における各地の都府県や市町村の成果や課題を抽出し、ニホンザル管理の方法論を整理することである。また、法律の改正内容を精査しながら、課題解消のための研究を促進することである。各地域の成果や課題を報告し合い情報の共有を図った。都府県・市町村が計画を策定する際に参照可能な資料の作成についても、議論を進めた。

この研究会では、研究者、国・県・市町村の担当者、保護管理事業関係者をはじめ 80 名の参加者が 2 日間にわたり議論を行った。演者は、ニホンザル保護管理に関わっている方々を中心にお願した。初日はニホンザル個体群管理、特に方法論の整理について話題提供があり、4 演題と 2 つのコメントにつき質疑を行った。2 日目は、ニホンザルの保全と管理について、現場課題の整理のため話題提供があり、6 演題と 1 つのコメントにつき質疑を行い、最後に 2 日間の議論の総括と今後の課題整理を含む総合討論を行った。

なおこの研究会は日本哺乳類学会保護管理専門委員会 ニホンザル部会ならびに日本霊長類学会が共催した。会議への提供話題と総括の内容は、日本霊長類学会の学会誌「霊長類研究」に 2015 年 4 月 30 日付電子版で早期公開している。

(URL) https://www.jstage.jst.go.jp/article/psj/advpub/0/advpub_31.002/_pdf

(プログラム)

2014 年 5 月 17 日(土)

ニホンザル個体群管理～方法論の整理～

13 時 00 分～13 時 10 分 森光由樹(兵庫県立大)

趣旨説明

13 時 10 分～13 時 50 分 鈴木克哉(兵庫県立大)

ニホンザル個体群管理の方法論 ～これまでの議論の整理と検討課題について～

13 時 50 分～14 時 30 分 宇野壮春(合同会社 東北野生動物保護管理センター)

分布拡大地域における現状と個体群管理について

14 時 30 分～15 時 10 分 清野紘典(株式会社 野生動物保護管理事務所)

個体群管理におけるモニタリングの現状と課題 ～効率的なモニタリングに向けて～

15 時 25 分～15 時 45 分 森光由樹(兵庫県立大)

地域個体群保全のための研究展望 ～個体群管理を進めるための遺伝情報～

15 時 45 分～16 時 15 分 コメント

川本芳(京大・霊長研), 大井徹(独立行政法人・森林総合研)

16 時 15 分～17 時 15 分 討論

5 月 18 日(日)9 時 00 分～15 時 30 分

ニホンザルの保全と管理～現場課題の整理～

9 時 00 分～9 時 10 分 森光由樹(兵庫県立大)

趣旨説明

9 時 10 分～9 時 50 分 羽山伸一(日本獣医生命科学大・獣医)

ニホンザルの管理に関する法律の改正と今後の課題

9 時 50 分～10 時 15 分 堀内洋(環境省 野生生物課鳥獣保護業務室)

鳥獣保護法の改正及びニホンザルの保護管理に関する最近の動きについて

10 時 15 分～10 時 45 分 滝口正明(一般財団法人 自然環境研究センター)

特定計画(都府県)における課題と今後

10 時 45 分～11 時 15 分 江成広斗(山形大・農)

市町村におけるサル管理の課題と今後

11 時 15 分～12 時 00 分 討論

13 時 00 分～13 時 40 分 山端直人(三重県農業研究所)

都府県のサル管理を推進するために何が必要か ～三重県を事例に～

13 時 40 分～14 時 20 分 渡邊義久(豊川市産業部農務課)

市町村のサル管理を推進するために何が必要か ～愛知県豊川市を事例に～

14 時 20 分～14 時 30 分 コメント

常田邦彦(一般財団法人 自然環境研究センター)

14 時 30 分～15 時 30 分 総合討論

(文責：森光由樹・川本芳)

「第 14 回ニホンザル研究セミナー」

開催日：2014 年 6 月 14 日(土)・15 日(日)

場所：京都大学霊長類研究所 大会議室(参加人数：55 人)

世話人：半谷吾郎

ニホンザル研究セミナーは、これまで過去 13 年に渡って、共同利用研究会や自主的な集会として実施してきた。この研究会では、ニホンザルを対象としたフィールドの研究者が、交流し討論できる場を作ることを目的としている。第 14 回目となる今回も若手研究者の方に修士課程や博士課程での研究成果を中心に発表をお願いし、中堅・ベテラン研究者が、それに対してコメントするというスタイルで行われた。また、相互に関連する研究を、異なる調査地・調査対象について行っている発表者同士が、相互の研究についてコメントしあい、今後の共同研究の可能性について議論する試みも行った。また、ポスター発表を公募し、修士・博士論文の途中経過などについて発表してもらう機会を設けた。2 日目には、フリーの GIS(地理情報システム)ソフトウェアである QGIS のワークショップを行った。GIS はニホンザルの生態・保全研究での重要なツールであり、その利用促進のため有用な企画であったと、参加者の方からも高評価をいただいた。

<プログラム>

6 月 14 日(土) 研究発表

10:43-10:45 半谷吾郎(京都大学霊長類研究所)

挨拶

10:45-11:45 川添達朗(京都大学大学院理学研究科)

群れの内外における野生オスニホンザルの社会関係

11:45-12:45 大谷洋介(京都大学霊長類研究所)

ヤクシマザル雄個体の一時離脱：集団内外での行動の差異

12:45-13:45 休憩

13:45-14:45 西川真理(京都大学大学院理学研究科)

屋久島に生息するニホンザルの群れの個体の凝集性と同調性

14:45-15:45 上野将敬(大阪大学大学院人間科学研究科)

勝山ニホンザル集団における毛づくろいの互惠性の至近要因に関する研究

15:45-16:00 休憩

16:00-17:00 栗原洋介(京都大学霊長類研究所)

屋久島海岸域に生息するニホンザルにおける採食行動の群間比較

コメンテータ：風張喜子(北海道大学)

17:00-18:00 ポスター発表

18:00～20:15 懇親会(所内にて、参加費：2000 円)

6 月 15 日(日) QGIS ワークショップ

9:30-10:00 望月翔太(新潟大学自然科学系)

勉強会(趣旨説明と GIS の基礎)

10:00-12:00 実習

12:00～13:30 休憩

13:30-15:20 実習

15:20～15:30 休憩

15:30～16:00 QGIS の方向性について＋質疑応答

ポスター発表

P-1 浅井隆之(鹿児島大学・農)、塩谷克典、稲留陽尉(鹿児島県環境技術協会)、藤田志歩(鹿児島大学・共同獣医)

ニホンザル農作物加害群の土地利用特性

P-2 中村勇輝(新潟大学大学院 自然科学研究科 環境科学専攻 流域環境学コース)

集落柵の設置がニホンザル農作物加害群の生息地利用に与える影響

P-3 河野穂夏、山田一憲、中道正之(大阪大学大学院人間科学研究科)

社会行動に基づいた飼育アビシニアコロブスの妊娠推定

P-4 谷口晴香(京都大学理学研究科)

野生ニホンザルにおける 2-3 ヶ月齢のアカンボウの食物選択：食物のかたさに着目して

P-5 勝 野吏子(大阪大学大学院 人間科学研究科)

敵対的交渉後場面におけるニホンザルのあいさつ音声の発声に及ぼす要因

P-6 横山慧(京都大学大学院理学研究科)

嵐山 E 群におけるニホンザルオトナオスの援助行動

P-7 豊田有(京都大・霊長類研究所)、清水慶子(岡山理科大・理学部)、古市剛史(京都大・霊長類研究所)

京都市嵐山群の高齢メスニホンザルにおける閉経後の性行動に関する内分泌学的研究

P-8 Lucie Rigai(Primate Research Institute, Kyoto University)、Cecile Garcia(Laboratoire de Dynamique de l'Evolution Humain)、

Takeshi Furuichi(Primate Research Institute, Kyoto University)

Signals contain in wild female Japanese macaques' face colour : Preliminary and promising results.

(文責：半谷吾郎)

「霊長類への展開に向けた幹細胞・生殖細胞・エピゲノム研究」

日時：2014 年 8 月 26 日(火)・27 日(水)

場所：京都大学霊長類研究所 大会議室(参加人数：約 60 人)

世話人：今村公紀

幹細胞、生殖細胞、およびエピゲノム研究は、現代生命科学の潮流において最前線に位置付けられ、世界中で多くの研究者が鎬を削っている。我が国はそのリーディングパートの一翼を担っており、研究の成果は基礎研究に留まらず、繁殖や生殖工学・発生工学に活用されている。一方、これらの研究は基本的にマウスを対象に展開されており、霊長類に対する研究はその重要性が年々高まりつつも普及には至っていないのが現状である。霊長類への研究の展開を促進するためには、第一にトップリーダーの研究者の方々に霊長類の研究プラットフォームと新規開拓領域としての意義・魅力を発信することが重要となる。そこで、本研究会では「霊長類を対象とした研究に既に取り組んでいる研究者」と「今後の利用とコミュニティへの周知を期待する研究者」を招いたセミナーを行い、霊長類への研究の展開の可能性について議論した。本研究会を通して、霊長類(および霊長研)の認知度を高めつつ、研究者を相互に連結した有機的ネットワークの形成に向けた第一歩を踏み出したものと期待している。

<プログラム>

8/26(火)

13:00～13:10 趣旨説明 今村公紀(京都大)

セッション 1

13:10～13:40 平井啓久(京都大) ヘテロクロマチンと染色体分化

13:40～14:10 多田政子(鳥取大) マウス ES 細胞における細胞周期依存的 DNA メチル化変換

セッション 2

14:20～14:50 古賀章彦(京都大) レトロトランスポゾンがセントロメアを乗っ取った

14:50～15:20 塩見春彦(慶應大) 霊長類生殖細胞における転移因子抑制機構

15:20～15:50 中馬新一郎(京都大) マウス精子形成過程のトランスポゾン抑制と RNP 制御

セッション 3

16:00～16:30 木村透(北里大) 始原生殖細胞の分化と脱分化

16:30～17:00 村上和弘(北海道大) 転写因子によるマウス始原生殖細胞の試験管内再構築

17:00～17:30 高田達之(立命館大) 非ヒト霊長類 ES,iPS 細胞分化における TEKTIN1 発現細胞の解析

セッション 4

17:40～18:10 久保田浩史(北里大) 哺乳動物精原幹細胞の共通性と多様性

18:10～18:40 今村公紀(京都大) 霊長類精子形成の発生・分化と培養

19:30～21:30 懇親会

8/27(水)

セッション 5

9:30～10:00 一柳健司(九州大) 進化的時間スケールでの霊長類生殖細胞エピゲノムのダイナミクス

10:00～10:30 中林一彦(成育医療研究センター) ヒトインプリントーム解析から見てきたヒト(霊長類)特異的エピゲノム進化

セッション 6

10:40～11:10 外丸祐介(広島大) 霊長類の体外培養系卵子について

11:10～11:40 新倉雄一(武蔵野大) 生殖の視点から女性医療を考える

12:00～13:00 ランチョンセミナー：iPS 細胞から疾患モデル細胞を作る ライフテクノロジーズジャパン

セッション 7

13:10～13:30 馬場庸平(慶應大) 霊長類多能性幹細胞由来神経細胞を用いた進化研究の試み

13:30～14:00 Thomas Muller(Hannover Medical School MHH) Stemness and epigenetic features of amnion-derived mesenchymal stroma cells of the common marmoset

14:00～14:30 佐々木えりか(慶應大) 次世代発生工学研究のモデル動物、コモンマーモセット

14:30～14:40 閉会挨拶 今村公紀(京都大)

(文責：今村公紀)

「第 2 回 ヒトを含めた霊長類比較解剖学—背部の基本構成と特殊化を探る—」

日時：2014 年 10 月 11 日 (土)

場所：京都大学霊長類研究所 大会議室(参加人数：約 20 人)

世話人：時田幸之輔(埼玉医科大学)、平崎鋭矢

ヒトを含めた霊長類比較解剖学として、今年度は、背部の形態学的特徴を考えた。背部は本質的に最初に形成された体幹の最も古い部分であるとされており、部位による分化の違いが少なく、一様な分節的構成を持つとされている(山田)。よって、基本的な形態が保持されている部位とも言える。背部を理解することは霊長類の体の基本構成を理解する上で重要であると考えられる。

一方、頭部という特殊に分化した部分との移行部である後頭部、および四肢との移行領域である肩甲帯、臀部は分節的構成が修飾され、理解の難しい領域である。これらの移行領域は霊長類各種の運動様式との関連も示唆され、霊長類固有の構造も予想される。

また、ヒトは直立二足姿勢という固有の姿勢をとる。よって、ヒト固有の形態も予想される。

本研究会は、背部を構成する、骨、筋、脊髄神経についての肉眼解剖学的な調査を紹介してもらうとともに、ヒトを含めた霊長類背部の基本構成と特殊化について、理解を深めることを目的とした。研究会は、下記のプログラムに示されるように多様な研究成果が報告され、活発な議論が交わされた。

<プログラム>

10/11(土)

13:00～13:25 場・受付

13:25～13:30 趣旨説明 時田幸之輔(埼玉医科大学)

I 骨 座長 小島龍平

13:30～14:00 大村文乃(東京大学) 両棲類有尾目の体幹部における筋骨格構造と環境との関係
14:00～14:30 加賀谷美幸(広島大学) サルの肩はどこにあるか：胸郭・前肢帯の骨格形態と生体の分析から

II 胸腰部の筋・神経 座長 荒川高光

14:40～15:10 岡健司(大阪河崎リハビリテーション大学) 療法士からみた類人猿の腰背部筋
15:10～15:40 布施裕子(リハビリテーション天草病院) 胸腰神経後枝内側枝の特徴
～胸腰部移行領域に着目して～
15:40～16:10 時田幸之輔(埼玉医科大学) 胸・腰神経後枝内側枝と横突棘筋群の分布から考える霊長類の特徴

III 後頭部の筋・神経 座長 時田幸之輔

16:20～16:50 小島龍平(埼玉医科大学) ブタ胎仔の頸部固有背筋の構成
16:50～17:20 矢野航(朝日大学) 耳介に分布する脳神経および頸神経皮枝の比較解剖学
17:25～17:55 竹澤康二郎(日本歯科大学新潟) 外側後頭神経の神経線維解析
17:55～18:25 相澤幸夫(日本歯科大学新潟) 頸神経後枝内側枝は本当に内側枝か
18:25～18:55 荒川高光(神戸大学) 頭板状筋の支配神経から見たヒト後頭部の特徴
閉会

(文責：時田幸之輔・平崎鋭矢)

「第 10 回犬山国際比較社会認知シンポジウム (The 10th Inuyama International Comparative Social Cognition Symposium)」

共催

日本学術振興会基盤研究(S)「海のこころ、森のこころ。—鯨類と霊長類の知性に関する比較認知科学—」

日時：2015 年 2 月 28 日～3 月 1 日

場所：京都大学霊長類研究所大会議室

後援：京都大学こころの先端研究ユニット

<プログラム>

2015/2/28

SESSION I

13:00-13:30 板倉昭二(京都大)Infants rely on helping and hindering actions to generate expectations about agents' fairness
13:30-14:00 岩崎純衣(京都大)ハトにおける展望的記憶の検討
14:00-14:30 植田彩容子(京都大)オオカミの目はなぜ目立つ?イヌ科動物の顔の色彩パターンの比較から
14:30-15:00 島田将喜(帝京科学大)社会的遊びとホモルーデンスの進化
15:00-16:00 施設見学

SESSION II

16:00-16:30 関 義正(愛知大)動物は視聴覚機器を介した対面コミュニケーションを好むだろうかーセキセイインコを用いた研究
16:30-17:00 澤 幸祐(専修大)“Sense of self-agency” in rats
17:00-17:30 今野晃嗣(帝京科学大)イヌの尻尾振りと情動伝染
17:30-18:00 幡地祐哉(京都大)鳥類における視野安定機能一歩行時頭部運動の分析ー
18:00-18:30 吉田弥生(京都大)イロワケイルカにおける音声研究の可能性
19:00- 懇親会

2015/3/1

SESSION III

9:00-9:30 池田彩夏(京都大)日本語学習児における Infant-Directed Speech と Adult-Directed Speech の使い分けの理解
9:30-10:00 磯村朋子(京都大)自閉症児における怒り顔への視覚的注意
10:00-10:30 新屋裕太(京都大)早産児における自発的啼泣と自律神経活動との関連

SESSION IV

10:45-11:15 田中友香理(京都大)触覚を介した母子間相互作用経験が母親の脳内情報処理に与える影響
11:15-11:45 古見文一(京都大)ロールプレイがマインドリーディングに及ぼす効果の転移
11:45-12:15 大久保街亜(専修大)裏切り者よ、汝、左の頬を出せ：ポーズの左右差と信頼感

SESSION V

13:15-13:45 山田祐樹(九州大)情動の配置
13:45-14:15 白井 述(新潟大)乳児期における Implied motion 知覚の発達

14:15-14:45 平松千尋(九州大)視知覚の種間比較研究: 素材質感知覚や顔色知覚、種間比較の難しさについて
14:45-15:15 平山高嗣(名古屋大)人の内部状態を顕在化する視覚的インタラクションのデザインとマイニング
15:15-15:45 石井敬子(神戸大)感情情報に対する注意の文化差
15:45-16:00 総合討論

2015年2月28日～3月1日の2日間、京都大学霊長類研究所において「第10回犬山比較社会認知シンポジウム(iCS2-10)」を開催した。このシンポジウムはその名の通り、主として社会的認知に関連する比較研究を進めている研究者を糾合し、この領域の現状と展望を広く共有しようという目的で2005年から京都大学霊長類研究所共同利用研究会として続けてきた。実際には、社会的認知、比較認知にこだわることなく、動物行動学、発達科学から、ロボット学、工学、哲学にいたる非常に幅広い領域から研究者を招いてクロスオーバーな議論ができる場となるよう心がけて運営してきた。

今回は、国内の若手研究者を中心に20名の講演者を招待し、それぞれの研究の紹介とその展望についてお話しいただいた。トピックは視知覚から情動の伝染まで、研究対象はオオカミからハトまで、とこれまで同様非常にバラエティに富んだものであった。バラエティに富むということは逆に統一感がないという危惧ももたれすが、それぞれの研究がいずれかの研究と何らかの接点を持つものばかりであり、その点では、「比較・社会・認知」というスコープの中での充実した議論を行うことができた。参加者は二日間で計50名であった。また、京都大学こころの先端研究ユニットの後援を受けた。

今回が10回の節目ということもあり、次年度以降は共同利用研究会という枠にとらわれることなく、数多くの研究者を糾合し議論する場として、新たな開催形態のもとで本研究会を継続していきたい。

(文責：友永雅己)

第43回ホミニゼーション研究会「霊長類学・ワイルドライフ・サイエンス」

日時：2015年3月5日～3月6日

場所：京都大学理学部セミナーハウス(参加人数：108名)

世話人：松沢哲郎、平井啓久、古市剛史、湯本貴和、マイク・ハフマン、岡本宗裕

リーディング大学院PWSと連携して、霊長類学とワイルドライフサイエンスの展望について、最新の研究動向に関する話題提供と議論を行った。2日目朝には、山極寿一総長のトークも行われた。その他にも国内外の研究者およびPWS履修生による発表が多数行われ、活発な議論が行われた。

<プログラム>

2015年3月5日(木)

Opening Remarks (13:15-13:30)

Session1 (Chair: Masaki TOMONAGA, 13:30-15:00)

Tetsuro MATSUZAWA “Perspectives of Wildlife Science”

Ikki MATSUDA “Following the Trail of the Elusive Proboscis Monkey in Borneo”

James ANDERSON “A Video Deficit Effect in Capuchin Monkeys”

Session2 (Chair: Takushi KISHIDA, 15:15-16:45)

Takashi HAYAKAWA “Eco-Genomics in Primates”

Kodzue KINOSHITA “Studies on Reproductive Physiology of Bornean Orangutan (*Pongo pygmaeus*)”

Hideki ABE “Abundance, Arrangement, and Function of Sequence Motifs in Avian Promoters”

Poster Session (17:00-)

2015年3月6日(金)

President's talk (9:00-9:30)

Juichi YAMAGIWA “WINDOW: The new idea for the education in Kyoto University”

Session3 (Chair: Yuko HATTORI, 9:30-10:30)

Ryo KUTSUMA “The First Year as PWS Student”

Kei MATSUSHIMA “Activity Report and Research Plan for Armadillo's Burrows”

Natsumi ARUGA “Research on Nursing Environment in chimpanzees in Kalinzu Forest and Education on Primates in Children in Uganda”

Aya YOKOTSUKA “What Influences on the Taboo Against Consuming Bonobo Meat in Bongando Oopulation at Amba, DR Congo”

Session4 (Chair: Andrew MACINTOSH, 10:45-12:15)

Kaede MIZUKOSHI “Report of This Year”

Kazuya TODA “How Did a Sub-adult Female Bonobo After Transfer Behave in Group-encounter with Her Natal Group?”

Sayuri TAKESHITA “Field Report: Physiological Variations on Steroid Hormones in Non-human Primates”

Nobuko NAKAZAWA “Activity Report”

Sofi Bernstein “Investigating the Vocalizations of Tibetan Macaques in the Valley of the Wild Monkeys at Mt. Huangshan, China and Collaborative Work with Anhui and Central Washington University”

Hiroko SAKURAGI “Getting Started in Tanzania”

Session5 (Chair: Ikuma ADACHI, 13:45-15:00)

Misato HAYASHI “Cognitive Development and Mother-infant Relationship in Captive and Wild Chimpanzees”

Yumi YAMANASHI “Welfare Studies of Captive Chimpanzees: Development of Practical Methodologies to Monitor and Alleviate Stress at a Sanctuary and Zoos in Japan”

Fumihiro KANO “A Comparative Study of Emotion and Cognition Using Both Physiological and Behavioral Measures in Bonobos and Chimpanzees”

Session6 (Chair: Fred BERCOVITCH, 15:15-16:45)

Chia TAN “Primate Conservation through Research, Capacity-building, Education and Integrated Partnerships”

Fred BERCOVITCH “Foraging Strategies of Giraffes and Baboons”

Jae CHOE “Longterm prospects for Korean ecology with a special emphasis on primate research”

Poster Session (17:00-)

Conservation Event (19:00-)

Organizers: Sofi BERNSTEIN & Cecile SARABIAN

(文責：松沢哲郎)

「豪雪地域におけるニホンザルの洞窟利用」

日時：2015年3月7日(土)・8日(日)

場所：京都大学霊長類研究所 大会議室 (参加人数：約15人)

世話人：柏木健司、高井正成

主催：京都大学 霊長類研究所

研究集会の主たる目的は、富山県東部の黒部峡谷で明らかになりつつあるニホンザルの洞窟利用について、これまでの研究成果を総括するとともに、今後の研究計画を構築することである。話題提供をお願いした演者の専門領域は、生態、冬季食性、糞分解生物、自動センサーカメラによる調査法に加え、古生物や洞窟古気候学、気象学等と多岐にわたる。研究集会では、複合領域からの視点で活発な議論が個々に時間を超過して交わされ、異分野間の相互の研究交流が図られるとともに、豪雪地域のニホンザルの生態の一側面としての「厳冬期洞窟利用」について、今後の研究計画等について議論が活発に行われた。豪雪地域で洞窟、かつ冬季は入山できない等、調査地域の研究環境は極めて厳しい状況にあるものの、今後、調査手法等の基礎的な部分を含む課題解決を含め、情報交換を密に行い研究を遂行していくことを確認した。

<プログラム>

3月7日 13時00分～

13:00～13:05 柏木健司(富山大)

「研究集会趣旨」

13:05～13:30 柏木健司(富山大)・高井正成(京大霊長研)

「ニホンザルの洞窟利用研究の現状」

13:30～14:00 矢野 航(朝日大)・辻 大和(京大霊長研)

「糞からみたニホンザルの冬季食性について」

14:00～14:30 石井 清(獨協医科大)

「サル穴で発見されたヤスデと糞分解過程について」

14:30～15:00 狩野彰宏(九州大)

「石筍記録から見る日本海側での気候変動」

15:00～15:30 松田一希(京大霊長研)

「自動撮影カメラによる動物観察：ボルネオ島の塩場に集まる動物たち」

15:30～15:45 休 憩

15:45～16:00 柏木健司(富山大)
「哺乳類の洞窟利用と化石化過程」

16:00～16:30 高井正成(京大霊長研)
「東アジアにおけるマカク化石の出土状況とニホンザルの起源」

16:30～17:00 川田邦夫(富大名誉教授)
「黒部峡谷の積雪と雪崩」

3月8日 9時00分～

9:00～9:30 吉田勝次(社団法人 日本ケイビング協会)
「ケイビングと学術調査について」

9:30～10:00 西岡佑一郎(大阪大学総合学術博物館)
「サル穴から見つかった小型哺乳類化石群集：ネズミも洞内生活していたのか？」

10:00～10:30 小川秀司(中京大)
「霊長類における崖の岩棚等の泊まり場選択について」

10:30～11:30 柏木健司(富山大)・高井正成(京大霊長研)
「総合討論及び今後の調査研究に関して」

(文責：柏木健司・高井正成)

「霊長類脳科学の新しい展開とゲノム科学との融合」

日時：2015年3月13日(金)13:30～3月14日(土)16:40

場所：京都大学霊長類研究所大会議室

研究会世話人：高田昌彦

平成25年度から開始された共同利用・共同研究プロジェクトの計画研究「霊長類脳科学の新しい展開とゲノム科学との融合」では、脳科学とゲノム科学との融合を目指して、革新的サルモデルや先端的研究手法による次世代の研究を展開することを目的としている。本研究会は、ヒトを含む霊長類を用いて、認知行動を支配する神経ネットワーク活動と神経ネットワーク活動を支配する認知ゲノム発現の生物学的フレームワークを明らかにするため、高次脳機能や精神・神経疾患に関する多様な研究を意欲的に展開している研究所内外の研究者(特に若手研究者)を対象にして、最新の研究成果紹介と情報交換、意見交換をおこなった。

<プログラム>

3月13日(金)

13:30～13:40開会挨拶 高田昌彦(京都大学霊長類研究所)

13:40～14:20精神神経疾患の霊長類(マカクザル)モデルの作出に向けて
磯田昌岐(関西医科大学)

14:20～15:00成体脳神経新生の in vivo 動態解析技術の創出
植木孝俊(名古屋市立大学)

15:00～15:30ブレイク、チンパンジー施設見学

15:30～16:00脊髄損傷からの運動機能回復を支える側坐核の役割
西村幸男(生理学研究所)

16:00～16:40体性感覚を光遺伝学によって操作する試み
関 和彦(国立精神・神経医療研究センター)

16:40～17:20大脳小脳連関と高次機能
田中真樹(北海道大学)

17:20～18:00帯状皮質運動野の動作制御への関与
星 英司(東京都医学総合研究所)

3月14日(土)

9:00～9:40 運動課題遂行中のサルにおける淡蒼球ニューロン活動のグルタミン酸およびGABA作動性調節
畑中伸彦(生理学研究所)

9:40～10:20光遺伝学によるサル神経回路機能の探索に向けて
松本正幸(筑波大学)

10:20～11:00DREADD-PETが可視化する霊長類脳科学の新展開
南本敬史(放射線医学総合研究所)

11:00～11:40ウィルスベクターを用いた神経回路改変技術による霊長類脳機能の研究
小林和人(福島県立医科大学)

11:40～12:10AAVベクターによる霊長類新生児への全脳的遺伝子導入

井上謙一(京都大学霊長類研究所)

12:10～13:00 ブレイク

13:00～13:30 RGMa 抗体治療を用いたサル脊髄損傷後の運動機能回復

中川 浩(京都大学霊長類研究所)

13:30～14:00 柔軟な判断の基盤となる積分器神経回路の動作原理の解明

宇賀貴紀(順天堂大学)

14:00～14:30 霊長類における精神・神経疾患関連遺伝子解析と認知ゲノミクスの展望

郷 康広(生理学研究所)

14:30～15:00 脳情報を眼の小さな揺らぎと脳幹のニューロン活動から読み取り脳を操作する

小林 康(大阪大学)

15:00～15:30 前頭連合野研究の新展開

筒井健一郎(東北大学)

15:30～16:00 ゲノム科学による霊長類脳の多様性の解明

橋本亮太(大阪大学)

16:00～16:30 サル視床前腹側核大細胞部 (VAmc) における、安定した物体価値の表現

安田正治(関西医科大学)

16:30～16:40 閉会挨拶 高田昌彦(京都大学霊長類研究所)

(文責：高田昌彦)